

海外だより

ヨーロッパ・スポーツ科学学会（ECSS）に参加して

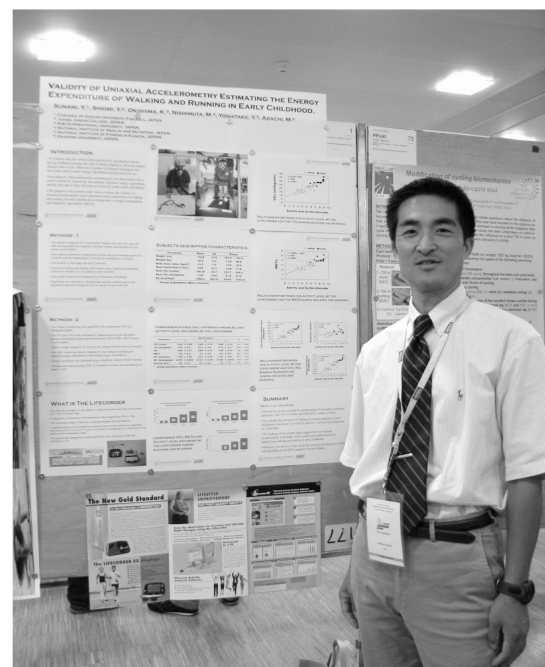
福岡女学院大学 角 南 良 幸

2006年7月5日～8日に行われたヨーロッパ・スポーツ科学学会（ECSS；European College of Sport Science）の第11回学会大会へ参加した。ECSSはアメリカスポーツ医学会（ACSM；American College of Sports Medicine）と並び世界的にも大規模なスポーツ・健康科学に関する学会である。今大会は60カ国以上、約2000名を越える参加者が集結し、発表演題数は1550にも及んだ過去最大の大会となった。開催地のスイス・ローザンヌはレマン湖北岸のほぼ中央部に位置し、スイス南西部ジュネーブ地方と北部チューリッヒ地方を結ぶ幹線上に位置している。フランス・パリとTGV（フランス国鉄（SNCF）が運行する高速鉄道）で接続しており、欧州各地からも列車でのアクセスが良好の都市である。歴史を感じる落ち着いた町並みの特徴であるが、最近では国際オリンピック委員会本部とオリンピック博物館があることから、オリンピックシティとしても注目されている。

本学会大会はACSMの欧州版といったところだろうか、心理、教育、社会学などの人文科学系分野の演題もあったが、全体的には、生理学、バイオメカニクス、スポーツ医学などの自然科学系分野の演題が多かったようだった。期間は4日間であったが、Plenary Sessionが4セッション、Invited Symposiaおよび口頭発表がそれぞれ50セッション、ポスター発表が42セッション開催されていた。私はポスター発表で、3日目第3セッション「PP3-03-1: Health and Fitness」で“Validity of uniaxial accelerometry during activities of walking and running in early childhood using compared oxygen consumption and metabolic equivalent.”という内容での発表であった。日本からの発表も数多くあり、九州からも多くの先生方が参加されていて驚いた。日本でもなかなかお会いできないのに、国際学会でお会いできるなんて、という感じであった。

ポスター発表は、全ての演題が1つのフロアに集約されており、活発な議論が繰り広げられて大盛況であった。それぞれ個別の発表時間があり、各人2分間のプレゼンテーションが要求されていた。英語が得意でな

い私は、ちゃんと質疑応答できるかかなり緊張していた。しかし、実際にはセッション毎の座長によって対応が異なったようで、完全にプレゼンテーションを要求していたセッションもあれば、座長とほぼ1対1で質疑応答しているようなところもあった。私のセッションは後者で、座長のHopman-Rockという女性の先生がいろいろと質問してくださり大変勉強になった。特に今回の発表で幼児の身体活動量の評価に用いた測定装置は、欧州では知られていない装置だったらしく、その精度や既存の加速度計との関連性などについて詳しく聞かれた。また、身体活動量の研究では欧州で有名なローザンヌ大学のSchulz教授が質問してくださり、とても有意義な時間を過ごせた。幼児の健康づくりのための身体活動量の詳細な把握はSchulz教授も非常に興味を持っておられたようで、実際既に計画進行中とのことであり、お互いががんばりましょうと励ましてくださった。その後、日本の親しい研究者をローザンヌ大学の研究室に案内するとのことで、タイミング良く帯同することが可能になった。ローザンヌ大学の医学部の研究室には、ヒューマンカロリーメーター



があり、そこでの実験について詳細に説明を受けることが出来た。Schulz 先生は、医師ではないということで医学部での業績づくりには困難が予想されるが、非常に精力的に仕事を推進しておられる先生だった。また、ポスター発表の会場で、中国人の若手研究者が興味を持って質問してくれたが、その研究者は、上海体育学院の魏勇（Yong Wei）先生で、よく話を聞いていると私の大学時代の後輩と同僚関係にあった先生であった。現在、その後輩は帰国しているが、研究に関する内容、上海体育学院の大学事情、中国における健康問題など様々な情報交換ができた。国際学会ならではの貴重な情報交換であったが、このような出会いもとても意義深いものだと感じた。

Plenary Session で最も興味を引いたのは、ECSS がこれから特に力を入れようとしている健康問題に関するテーマ「Health well-being and exercise」であった。「WHY HUMANS NEED TO BE ACTIVE TO STAY HEALTH」では、人は健康維持のためになぜ運動する必要があるのか、特にメタボリックシンドロームやこれらの改善に必要なメタボリック・フィットネスについて解説があり、最近注目されている健康運動による遺伝子情報の賦活についても興味深い紹介をされていた。また、「QUALITY OF LIFE, WELL BEING AND EXERCISE」では、運動は直接的に循環器系や代謝系に好影響を及ぼすだけでなく、心理的、社会的にも付随的な好ましい影響をもたらし、しかも副作用が無い非常に理想的な“薬”のような役割を果たすことが紹介されていた。このセッションは、スポーツ色が強かった ECSS の最も最初のセッションで行われ、今後の ECSS において期待される分野として示されたものと感じた。

欧州最大のスポーツ・健康科学の学会ということで、展示機器のスペースも広大であった。しかも、様々な分野の最新の測定機器が一堂に会しているので圧巻であった。特に、歩行時の足型接地圧の測定装置とか、

加速度計と心拍数を同時計測できる新しい身体活動量測定装置などが興味深かった。

4日間という長い開催期間であったが、それぞれの企画が盛況でとても充実した学会であった。内容的には、まだまだスポーツ科学の分野が非常に多かったが、健康づくりに関連する内容も年々増加傾向にあり、また、欧州でも特に期待されているとのことであった。本学会は、若手の研究者も多く刺激的な多い学会であった。体育の授業に関する情報はあまり収集することができなかったが、今後は欧州の体育事情についても注目していこうと感じた。

紙面を埋めるつもりで努力したものの、不肖にも私の国際学会発表記となってしまった感があり、“海外だより”の責務を果たせたかどうか心配である。しかし、特に私よりも若い先生方がこのような刺激的な国際学会へ参加するきっかけになれば幸いである。



大学めぐり

九州工業大学

九州工業大学 磯貝浩久

1. 九州工業大学の沿革

九州工業大学は、北九州の実業家安川敬一郎氏により1907年に設立された私立明治専門学校が前身であり、昨年100周年を迎えた。安川氏は、稼いだお金を酒食のみに浪費する炭坑成金が多いなかで、「国家によって得た利益は国家のために使うべき」という信念のもと巨額の私財を投じたとされる。「技術に堪能なる士君子」の養成が創立の精神であり、現在の教育理念でもある。

1949年に九州工業大学が設置された時は工学部だけの単科大学であったが、1986年に情報工学部を設置、2000年に生命体工学研究科を設置し、現在は2学部3研究科となった。本学は、工学部と工学研究科がある戸畑キャンパスと、情報工学部と情報工学研究科がある飯塚キャンパス、そして生命体工学研究科のある若松キャンパスの3キャンパスに分かれている。学生数（平成19年5月現在）は、学部生4422人、大学院生1636人の計6058人である。

2. 大学における体育・スポーツ環境

1) 体育関連施設等

戸畑キャンパスには、体育館（バドミントンコート6面）、グラウンド、武道場、弓道場、プール（50m7コース）、野球場、テニスコート（10面）がある。飯塚キャンパスには、体育館（バドミントンコート8面、トレーニング室、柔剣道場）、多目的グラウンド、プール（50m7コース）、テニスコート（7面）、野球場が



ある。若松キャンパスには自前の施設は無いが、北九州市立大学の施設を利用できるようになっている。

各キャンパスでスポーツ用具の貸し出しを行っており、学生はテニスラケット、サッカーボール、ソフトボールの用具、キャンプ用具、スキー用具などを借りることができる。

2) 体育系クラブ

キャンパスが車で1時間ほど離れた場所にあるため、多くの体育系クラブは学部毎にクラブを組織して活動している。戸畑キャンパスには、合気道部、アイスホッケー部、アメリカンフットボール部、空手道部、弓道部、剣道部、航空部、硬式野球部、硬式庭球部、サイクリング部、サッカー部、山岳部、自動車部、柔道部、準硬式野球部、少林寺拳法部、水泳部、スキー部、漕艇部、ソフトテニス部、卓球部、バスケットボール部、バドミントン部、バレーボール部、ラグビー部、陸上競技部の26クラブある。

飯塚キャンパスには、水泳部、ラグビー部、剣道部、バスケットボール部、ハンググライダー部、秀心流合気道部、陸上競技部、ソフトテニス部、バレーボール部、軟式野球部、硬式テニス部、少林寺拳法部、サイクリング部、空手道部、サッカー部の16クラブある。

北九州インカレなどの大会では、学部単位に大学から2チームが参加することができる。

3) 体育スタッフ

戸畑キャンパスでは、工学部共通講座（平成20年4月から工学研究院人間科学系）に2名の体育教員（橋本先生、鳥井先生）が在籍し、授業とクラブ指導を担っている。また、飯塚キャンパスでは、情報工学部共通講座（平成20年4月から情報工学研究院人間科学系）に2名の体育教員（平木場先生、磯貝）が在籍し、授業とクラブ指導を担っている。体育教員の数名は、生命体工学研究科で授業と論文指導などの教育にも携わっている。

3. 健康・スポーツ関連授業科目

1) 授業科目名と必修・選択

工学部では、体育実技にあたる「保健体育A：1年



前期「保健体育B：1年後期」の2単位が必修になっている。2年生から4年生が取れる選択科目として、「健康スポーツ科学論」「応用スポーツコースⅠ」「応用スポーツコースⅡ」がある。

情報工学部では、実技系科目「運動科学Ⅰ：1年前期」「運動科学Ⅱ：2年前期」「運動科学Ⅲ：2年後期」、講義系科目「健康・スポーツ科学論演習：1年後期」の4単位が必修である。3年生、4年生を対象とした選択科目として「運動科学Ⅳ」がある。

2) 情報工学部の授業の特色

私が所属する情報工学部の授業を対象に、特色あるいくつかの取組みを紹介する。「健康・スポーツ科学論演習」では、教員の専門性（運動生理学、スポーツ心理学、体育社会学、トレーニング論等）を授業に活かすため、非常勤を含めた教員がオムニバス方式で授業を行っている。4人の教員の授業を3回ずつ受ける

といった形式の授業である。また同授業では、各教員の授業内容をまとめてテキストを作成した。「現代人のからだと心の健康」を杏林書院から2006年に出版し、現在授業で使用している。

1年前期の「運動科学Ⅰ」では、実技への導入という位置づけから、種目を選択するのではなく、テニス、サッカー、ソフトボール、卓球、バドミントンの5種目全てを受講するという方式をとっている。また、同授業では、消防署員による救急法の講習や水泳を選択させて行っている。

また、体育教員の専門性を活かしながら、情報工学に関連する授業も行っている。平木場先生は運動生理学を基礎として「運動・人間機械論」を担当し、磯貝はスポーツ心理学を基にして「運動行動情報論」を担当している。

4. 今後の課題

体育関連施設などのハード面では、両キャンパスの体育館、テニスコートなどの老朽化への対応やトレーニング器具の充実が課題である。予算が関係するので早急というわけにはいかないが、必要性を訴えていくことが大切だと感じている。カリキュラムや授業内容などのソフト面では、選択できるスポーツ種目の充実や、授業内容の吟味などが課題としてあげられる。また、低調になっているクラブ活動を活性化するための方策を検討することも課題だと思われる。

「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」春季研修会の概要

1. 開催期日：平成19年3月13日（火）～14日（水）

2. 会場：龍登園（佐賀県大和町川上峡温泉）

3. 研修内容：

大会テーマ「今，大学体育に求められるもの」

(1) 特別講演「関東の大学におけるスポーツ教育の新たな展開」

沼澤 秀雄（立教大学）

(2) 招待講演「アリゾナ州立大学における体育・スポーツ事情」

Dr. 美弥 RAND（アリゾナ州立大学）

(3) シンポジウム

「今，大学体育に求められるもの ― 社会・大学・学生の視点 ―」

コーディネーター 福本 敏雄（佐賀大学）

「科研費企画調査のデータ分析から」 正野 知基（九州保健福祉大学）

「大学職員の視点から」 宝来 隆（久留米大学御井学舎教務課）

「学生の視点から」 淵田 吉男（高等教育開発推進センター長）

(4) 研究発表

1) 大学生に対する生活習慣病の一次予防指導について ― 体力と身体活動水準に関する疫学的知見から ―

山崎 先也（第一福祉大学）

2) 健康科学を導入した体育実技の選択理由と授業評価について

角南 良幸（福岡女学院大学），大隈節子（福岡女学院大学非常勤講師）

3) 体育・スポーツ系大学教育に求められるもの ― 社会が求める人材育成に向けて ―

伊藤 友記（九州共立大学）

4) 「生活の体育化」の実践をめざした体育・健康科学理論

飯干 明（鹿児島大学）

5) インドネシアの障害児体育の現状と教育協力支援

柿山 哲治（活水女子大学）

6) 保健体育授業の相互干渉モデル構築のための基礎作業 ― リアリティ構成主義の観点から ―

根上 優（宮崎大学）

平成18年度 春期 体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議に参加して

長崎純心大学 熊野 晃 三

本研究会は、毎年九州各県持ち回りで、3月中旬に開催される九州地区大学体育連合の中核となる催しです。例年できる限り参加させて頂いておりますが、出席する度に大学体育に関する様々な示唆を受けると共に、新たな視点を発見することのできる貴重な研修会となっています。今回も、「今、大学体育に求められるもの」のテーマの下で、一般研究発表、招待講演、特別講演、シンポジウムと刺激的な報告が行われ、充実した研修会となりました。

初日の一般研究発表では、まず第一福祉大学の山崎先也先生から「大学生に対する生活習慣病の一次予防指導について～体力と身体活動水準に関する疫学的知見から～」というテーマで、体育・健康関連の授業からの実践的なデータを中心に分析された結果が紹介され、大学生についても生活習慣病を予防していくためには、運動、栄養、休養などの生活改善を実践していくことが重要であることが報告されました。

福岡女学院大学の角南良幸先生からは、「健康科学を導入した体育実技の選択理由と授業評価」と題して、先生が当該大学に着任して6年間の授業において、スポーツ中心の授業から、健康科学に関する実習を盛り込んで取り組んできた体育実技について、特に、自分自身の身体について知ることや、健康づくりの必要性について知ること、さらに健康づくりの必要性について実体験できるような授業の展開が紹介され、学生によるその授業についての評価も非常に良好であったことが報告されました。特に、大学教育において、数少ない体育関係スタッフでの授業実施の奮闘振りが如実に伝えられ、同様の環境条件で大学教育に携わる者にとっては、新鮮な示唆と元気を与えられる内容でした。

九州共立大学の伊藤友記先生の「体育・スポーツ系大学教育に求められるもの～社会から求められる人材育成に向けて～」では、まず、九州共立大学のスポーツ学部の設置経緯が紹介され、新設されたスポーツ系学部求められる高校生（スポーツ系クラブ在籍者）、進路指導担当および保健体育担当の高校教員、そして、体育・スポーツ系学部卒業後の進路として想定される企業を対象とした要望の調査結果が報告されました。

高校生にとっては、大学で取得できる免許・資格に興味深く、卒業後の進路や就職に関心が高いこと、高校教員にとっては、高校生と同様に免許・資格や卒業後の進路や就職を大学への進路指導で重視するものの、大学においては、社会常識・礼儀・マナーを身に付けてほしいと考えている点が興味深く思われました。この点は、就職が想定される企業においても同様で、学生や大学に期待する内容として、社会常識・礼儀・マナーをより重視すると共に、コミュニケーション能力を持つ人材を求めていることに、大学に対する企業側のニーズが明確に示されているというものでした。

鹿児島大学の飯干明先生の『『生活の体育化』の実践を目指した体育・健康科学理論』では、「生活の体育化」を身体活動、精神活動、栄養、休養、環境刺激の5つの体育手段に分けて、それらに関する授業の受講前後の学生の行動変容を比較検討し、体育、健康科学理論を通してどのような行動変容段階の変化が見られたかということが報告されました。

活水女子大学の柿山哲治先生の「インドネシアの障害児体育の現状と教育協力支援」では、先生が継続的に研究フィールドとして取り組まれているインドネシア、ジャカルタ市およびバンドゥン市におけるフィールドワークから、インドネシアにおける障害児体育の現状と、バンドゥン市内の特殊教育諸学校で実施した教育協力支援についての報告がなされました。

宮崎大学の根上優先生の「保健体育授業の相互干渉モデル構築のための基礎作業～リアリティ構成主義の観点から～」では、これまで「魅力ある授業」や「価値ある授業」が排除してきたリスクやストレスといった不安定な環境要因を含む、「エッジワークのある授業」を授業の三次元的・相互干渉モデルの第三の対立軸として紹介され、惰性化した授業を蘇らせるための試みが報告されました。そして、学生にとって真に魅力的で価値ある授業は、学ぶことを通じて「それ以上のものが得られること」すなわち、「驚きの経験」を享受できる授業であり、学生自身が、その授業の世界を「いかに生きられたか」ということが重要であるという視点は、筆者にとって大変印象深い指摘となり

ました。

招待講演として、アリゾナ州立大学のDr. 美弥RAND先生より、「アリゾナ州立大学における体育・スポーツ事情」と題して、アリゾナ州立大学における身体活動、および健康やスポーツに関するプログラムの内容等の紹介がなされ、当該大学の体育関連授業の年次を追った展開についての講演がありました。日米の違い、あるいは州立大学という特性はあるにせよ、アメリカ屈指の大規模校でありながら、時々の状況に応じたカリキュラムの組み替えや、各組織の統廃合の素早さには目を見張るものがありました。同時に、アメリカの州立大学のスポーツへの力の入れ方にも、大変驚かされるものがありました。

特別講演として、立教大学の沼澤秀雄先生から、「関東の大学におけるスポーツ教育の新たな展開」と題して、立教大学が来春設置する予定のスポーツ系新学科の設立に至る経緯とその内容が細かく紹介されました。現在の大学のマーケット環境としては、健康・医療・福祉系の人気が高く、中でも保健・衛生系の志願者が増加傾向にあること、関東周辺のスポーツ関連学科では、特定の偏差値の受験生の受け皿となる大学が希薄なこと、そして、出口（人材）におけるニーズや地域の特徴的なニーズなど、競合環境をも含めて細かな分析がなされていました。そして、わが国の様々なスポーツ政策や国際的な競技力の強化施策なども総合的に意識した背景の中で、コミュニティー福祉学部にはスポーツウェルネス学科を設けることになったと、結論づけられました。ここで報告された内容は、ある一つのスポーツ関連学科の設置の紹介にとどまらず、我々大学における体育・スポーツ担当者が現在、および今後においてしっかりと認識しておかねばならない多くの視点が含まれており、大変示唆に富むものでした。

二日目のシンポジウムは、「いま、大学体育に求められるもの～社会・大学・学生の視点～」というテーマで実施されました。まず、九州保健福祉大学の正野

知基先生からは、大学体育の教育効果を実証し、大学体育の根拠を示す取り組みとして、プールでの運動が水泳だけではないということを実感させる授業として実施された「日常生活への般化を目指した水中運動授業の試み」が紹介されました。

次に、久留米大学の宝来隆先生からは、大学事務職員として在籍される立場で、「大学事務職員の視点から」大学体育についての報告が行われました。現在、各大学において実施されている学部学科等の改組は時流を読んでいるものですが、その中で、近年スポーツにも流行の兆しが見えてきていること。その一方で、経営的視点から大学体育を見た場合、利益率の低い系列科目として淘汰される対象になりはしないかという懸念があること。そのためにも、体育が大学教育の中でいかに貢献しているのかということが明確に示されていかなければならないということなどの指摘がありました。大学職員という専門職教育が始まった今日において、その立場からの切り口は、これまでに無い斬新かつ刺激的な内容だったと思います。

高等教育開発推進センターの淵田吉男先生からは、「学生の視点から」と題して、学生が大学体育をどの様に評価しているかということについて、九州大学での調査結果を報告して頂きました。この中で、GPA制度の解説やこれを利用しての成績評価の問題点なども指摘され、今後のGPA制度の活用においても大変参考となる内容でした。

二日間にわたって行われた研究会は、今回も大変盛会かつ示唆に富むものでした。特に、我々体育・スポーツ関係者にとっては、体育・スポーツに対して、これまで以上に社会の関心が寄せられる今日においてこそ、大学体育の根拠とその役割を明確にすると共に、学生のニーズを的確に捉え、実践していくことの重要性が再認識された研究会となりました。

最後に、九州地区大学体育連合の事務局、並びに佐賀県の関係各位におかれましては御疲れ様でした。感謝の内に御報告を終えたいと思います。

春期研修会を終えて

西九州大学 近藤芳昭

平成18年度春期研修会が閉会して数ヶ月が経過した現在、まず研修会を振り返って思うことは、年度末の慌ただしさの中であつという間の2日間だったことです。初日の研究発表から招待講演、特別講演、情報交換会そして2日目のシンポジウムと、研修会は多数の出席者によって活発な討議が行われました。この研修会が盛大にまた無事終了できましたことは、関係大学の先生方そして本会事務局のご支援ご協力によるものと心から御礼を申し上げます。また、招待講演、特別講演、シンポジウムの講師、司会、コーディネーターをご多忙の中こころよく引き受けていただいた先生方には、深く感謝申し上げます。

佐賀県が、平成18年度春期研修会の当番県になることは以前から承知しておりましたが、同年に九州体育・スポーツ学会も開催されることもあって、準備を本格的に始めたのがかなり遅くなってしまいました。しかも私自身が、これまでに一度だけ研修会に参加したぐらいで、ほとんど状況もわからないまま担当を引き受けましたので、たいへん周囲にご迷惑をおかけいたし

ました。

このような状況の中で、研修会プログラムは企画委員会や理事会等で企画、検討され、事務局で調整された内容が各大学関係者へ案内されましたので、私に与えられた主な役割は会場の確保と当日の準備そして情報交換会でした。会場は、前回の情報交換会でゆっくりでき温泉があるとなお望ましいという声に応えて、佐賀市内にも近い川上峡にある龍登園に決めましたが、参加人数や宿泊者数が不確定の状況で進めなければならぬことで、龍登園にもたいへんご迷惑をおかけしました。心配していた情報交換会も40名の参加者で盛会に開催でき、会員の親睦と情報交換の役割を果たしたものだと思っております。

最後になりましたが、今回の研修会の開催にあたり理事長の大浦隆陽先生をはじめ事務局ご担当の先生方、特に宮平喬先生にはいろいろとご指導いただき感謝いたします。そして、今後ますますの大学体育の発展を願ひ、次回の当番県へ引き継ぎたいと思います。